

Mother and Child Bush warbler

Two bush warblers flew to a garden every morning.

“Mom, today again bush warblers came to the garden.”

Sho-chan, through a glass window, said.

“They come to look for their food.” His mother answered.

“They are mother and child, aren’t they?”

“They must be. The mother came to a village with her child born in a mountain because it was winter.”

“So cute!”

Watching them, *Sho*-chan said.

The chirping bush warblers stopped on a branch of red fruits or sometimes flew between trees, searching for insects.

“Ah, they flew away.” *Sho*-chan said.

Soon his elder brother and sister came home from school.

“I’ll catch them tomorrow.”

The brother, hearing about the bush warblers, said.

“You shouldn’t do such a thing.”

The sister said.

“They will warble well in March if we take good care of them.”

The brother said.

Sho-chan, hearing what his brother said, thought of keeping them in a cage by himself.

“Brother, please catch the bush warblers to keep them.”

Sho-chan asked his brother.

“You must not do such a thing because it’s merciless.”

The mother said.

“So, let me keep a pigeon.”

“No, you must not.”

“So, may I keep a dog?”

Sho-chan never listened to his mother.

“All right. I’ll catch bush warblers.”

The brother said.

“If you can’t catch them in spite of the promise, it will make a fuss.”



The mother got worried.

“I can do it.”

The brother promised *Sho*-chan.

The next day, the brother put insects into a cage, making a device of the door shutting down when a bush warbler fed them, which he left under a tree of azalea.

After a long time when they forgot the bird, *Sho*-chan cried.

“There is a bush warbler in the cage.”

The brother ran there and moved it to another cage.

“It’s a child.” The brother sad, seeing the small bush warbler.

“I feel sorry for it. So let it free.” The sister said.

“Keep it in the cage.” *Sho*-chan wouldn’t listen to her.

“It’s fun. I can catch it again.”

The brother set the trap cage again under the azalea, after he fed the child bird.

“You can’t catch a bird again.” The sister said.

When they were talking happily, seeing the cage covered with a wrapping cloth, another bush warbler entered the trap cage, flapping its wings.

The brother ran to the cage.

“It’s big. This is the mother bush warbler.”

When he said so, they, face to face, were so surprised that they had no words for a while.

Sho-chan was so pleased and said,

“Let keep the two bird together in a cage.”

“Well, *Sho*-chan. The mother came to help her child and she was caught, too. If you, *Sho*-can, should be kidnapped by an abductor and your mother, who came to help you, should be caught, too, how would you feel?”

The mother said.

“It’s so sad. Let them free.”

The brother said at once. *Sho*-chan seemed to understand his mother and said,

“If you catch another bird, please keep it in the cage.” He said to his brother.

“Well I’ll set them free.”

The brother lifted the entrance of the cage.

Which of them do you think flew away first from the cage?

The child bush warbler flew away first and the mother followed it.

“Did you see them?”

The mother, so admired by it, said to her children. (2023.2.26 by Kudo : Original by OGAWA Mimei)

子うぐいすと母うぐいす

小川未明

毎朝きまって、二羽のうぐいすが庭へやってきました。

「お母さん、今日もまた、うぐいすがきましたよ。」

正ちゃんは、ガラス戸から、こちらをのぞいていました。

「餌をさがしにくるのです。」と、お母さんは、おっしゃいました。

「母うぐいすと、子うぐいすですね。」

「きっとそうでしょう。お山で生まれた子供をつれて、冬になったから里へきたのです。」

「かわいいな。」と正ちゃんは、見ていました。

うぐいすは、赤い実のなった枝に止まったり、また時々木の間をくぐったりして虫をさがしながら、チャッ、チャッと、いって鳴いていました。

「ああ、もういってしまった。」と、正ちゃんがいました。そのうちに、兄さんや、姉さんが、学校から帰ってきました。うぐいすの話が出ると、

「明日、うぐいすをとってやろう。」と、兄さんがいました。

「そんなことをするもので、なくてよ。」と、姉さんが、いました。

「上手に飼うと、三月ごろいい声で鳴くぜ。」と、兄さんが、いました。

だまって、兄さんの話をきいていた正ちゃんは、うぐいすをかごの中に入れて、自分でかわいがって、飼ってみたくになりました。

「お兄さん、うぐいすをとっておくれよ。」と、正ちゃんは、頼みました。

「かわいそうだから、そんなことをしてはいけません。」と、お母さんが、おっしゃいました。

「じゃ、僕、鳩を飼ってもらおうよ。」

「いけません。」

「じゃ、犬を飼ってくれる？」

正ちゃんは、なんととっても、いうことをききません。

「よし、明日、うぐいすをとってやろう。」と、兄さんが、いました。

「そんな約束をして、もしとれなかったら、また大騒ぎですよ。」と、お母さんは、心配なさいました。



「なに、僕、うまくとってみせます。」と、兄さんは、正ちゃんに、約束をしました。

いよいよ翌日のことでした。兄さんは、虫をかごの中へ入れて、うぐいすが、それを食べに止まる、上からふたの被さるような仕掛けにして、これをつばきの木の下に置きました。

みんなが、忘れていた時分、

「うぐいすがかかっている！」と、正ちゃんが、叫びました。兄さんはすぐに飛んでいって、とったうぐいすを別のかごの中に移しました。

「まだ、子供だな。」と、小さいうぐいすを見ながら、兄さんがいいました。

「かわいそうだから、逃がしてやってよ。」と、姉さんが、いいました。

「逃がしちゃいけない。」と、正ちゃんが、ききません。

「おもしろいな、まだとれるぜ。」と、兄さんは、いまとったうぐいすに餌を造ってやってから、またつばきの下へ、捕りかごを出しておいたのでした。

「なんで、そんなにとれるものですか。」と、お姉さんが、いいました。そしてみんなが、ふろしきをかけた鳥かごを見ながら、かわいらしいなどと話をしていると、また、ばたばたといって、他のうぐいすがかかったのであります。

捕りかごのところへ走っていった、兄さんが、

「大きい、母うぐいすだ。」と、いったときは、みんな、顔を見合わせて「まあ。」といって、ほかに言葉が出なかったのであります。独り、正ちゃんだけは、うれしがって、

「二羽、いっしょにしておくといいね。」と、いっていました。

「ねえ、正ちゃん、子供をさがしにきて、お母さんもかかったのですよ。もし正ちゃんが人さらいにつれてゆかれて、それをさがしにいったお母さんもつかまったらどうしますか。」と、お母さんが、おっしゃいました。

「かわいそうだから、逃がしてやろう。」と、すぐに、兄さんが、いいました。そして、正ちゃんも、また、お母さんの話が、わかったとみえて、

「こんど、他のをとったら飼って。」と、いいました。

「さあ逃がしてやりますよ。」

兄さんは、みんなの前で、二羽のうぐいすの入っている、かごのふたを開けました。すると、みなさん、どちらが先に口から出たと思いますか？ 先に子うぐいすが出ました。母うぐいすがその後から逃げてゆきました。

「みんな、よく、いまを見て？」と、そのとき、お母さんが、感心しながら、子供たちを見ておっしゃいました。